慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	青年期後期の挫折観に関する心理学的考察： 失敗観との違いに着目して
Sub Title	A psychological study about the view of "zasetsu" for late adolescents: the difference from the view of failure
Author	神原, 知愛(Kanbara, Chiai)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2010
Jtitle	哲學 No.123 (2010. 3) ,p.185- 205
JaLC DOI	
Abstract	The purpose of present study was to clarify experimentally what both the view of "failure" and of "zasetsu (a setback or a frustration)" are like and what di
Notes	特集：教育学の射程 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000123-0185

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

青年期後期の挫折観に関する心理学的考察

――失敗観との違いに着目して――

神　原　知　愛*

A Psychological Study about the View of "Zasetsu" for late Adolescents: The Difference from the View of Failure

Chiai Kambara

The purpose of present study was to clarify experimentally what both the view of "failure" and of "*zasetsu* (a setback or a frustration)" are like and what differences these have for late adolescents. I hypothesized that the view of "*zasetsu*" includes more sights what to do after its experience. I examined if this hypothesis is supported, if the experience of "*zasetsu*" influences the views of "failure" and "*zasetsu*", and what features the late adolescents' views have. The results were as follows: (1) the hypothesis was supported, (2) the experience of "*zasetsu*" had no influence on the views, (3) late adolescents were more likely to have the sights what to do after the experience of "failure" into the views. Besides, to build a process model how late adolescents overcome "*zasetsu*" and to verify it are needed.

* 慶應義塾大学社会学研究科教育学専攻後期博士課程２年

0. はじめに

大学生の無気力傾向が，“入学した大学が第1希望の大学ではなかった”，“授業・実習のレベルについていけない”などの挫折感から発生している（齋藤，2005）場合もあるように，青年期において「挫折」のような何かをきっかけとして無気力に陥ることもあるだろう．だが，特に青年期という若い世代の者が「挫折」を経験し，もしその経験をきっかけにトラウマが残ったり，自分の将来に希望が持てない状態に陥ったりしていたら，それはその人の人生に対して少なくともよくない影響を与えるように思える．しかし，たとえ青年期でも，生きていればこのような経験を避けることの方が難しい．ここで重要となるのが，このような「挫折」という経験を自分自身がどうとらえるかということである．すなわち，そのような経験を自分なりに受け入れたり意味づけたりしていれば，自分自身にとって必ずしも否定的な影響だけをもたらさない可能性がある．たとえば，三枝(1982)は，挫折という経験に耐えることは「環境と主体と，その関係についての自己吟味」であり，また，「この自己吟味にもとづいて，より新しい関係を創出することであり，その結果としての自己の更新であり，実現である」と主張している．つまり，「挫折」によって新しい自己概念を獲得したり，新たな自己実現に向かう場合があるということである．また，「挫折体験は，本人にとっても周囲にとっても，新しい自己を発見する大きなチャンス」（永井，1993）になったり，「挫折を繰り返し，それと自分なりに取り組み乗り越えながら，人生を生きていくことが人間の成長にとって非常に重要」（阿部，2005）であったりするということも言われている．これらの主張は，実証的な研究に基づいて提示されているわけではないが，心理学的視点から述べられているものであるため有益である．

それでは，実際に青年期の若者は「挫折」をどのようなものだと考え，

どのように意味づけているのだろうか．この疑問について検討する前に，そもそも（心理学的視点でとらえた）「挫折」とはどのようなことかについて考察する必要がある．これまでに「挫折」とはどのようなことかを実証的に扱ったり，心理学的な考察を与えたりした研究はほとんどないと言えるだろう．ちなみに，辞書（『大辞泉（増補・新装版）』）上での「挫折」は，「仕事や計画などが，中途で失敗しだめになること．また，そのために意欲・気力をなくすこと」とされている．しかし失敗といえども，普段するような失敗や自身にとってさほど重要ではない失敗であれば，それが将来の希望を失うような「挫折」を導くとは考えにくい．では，ただの失敗と「挫折」との違いはどのような点にあるのだろうか．

以上のような疑問を検討する際に手がかりとなるのが，動機づけ理論の中でも失敗によって生じる無気力を扱う，Seligman & Maier (1967) が提唱した「学習性無力感 (Learned Helplessness) 理論」であろう．

1. 「挫折」とは　―「失敗」との違い―

1.1.　学習性無力感 (Learned Helplessness) に関する理論からの考察

1.1.1　学習性無力感理論 (Learned Helplessness Theory)

学習性無力感理論 (Learned Helplessness Theory) は，Overmier & Seligman (1967) による犬の回避行動実験がもととなっている．その実験で Overmier & Seligman (1967) は，電気ショックを回避できる状況であるにも関わらず，そのショックを回避しようとせず甘んじて受けているような犬がいることを発見した．そこで，このような犬の無気力現象は身体的な損傷によるものではなく，心理的な障害によるものではないかと考えた．その後，Seligman & Maier (1967) は，電気ショック回避を自分で統制できない（統制不可能性）経験，または，自分で何か行動することと電気ショックが切れることとの間に随伴性がない（非随伴性）経験がくり返されることによって，統制不可能性（非随伴性）を認知し，今後も統

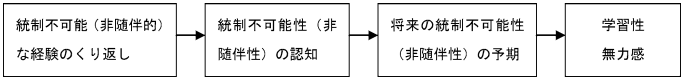

図１　学習性無力感理論（Seligman et al. (1971) を一部修正）

制不可能（非随伴的）であろうという予期をすることで無気力状態になることを明らかにした（図１参照）．そこで，このような無気力は学習によって獲得されたものであるために，「学習性無力感 (Learned Helplessness)」と呼ばれるようになり，人間にも当てはめられるようになった．

たとえば，Hiroto (1974) や鎌原 (1985) は，人間の統制不可能性の認知が実際に無力感を引き起こすかどうかを調べるため，不快な騒音を用いた実験を行った．その結果，騒音からの回避を統制できないことのくり返しによって後のテスト課題の成績が低下し，無力感が生じることが明らかになった．また，Miller & Seligman (1975) は，統制可能な群よりも統制不可能な群の方が憂うつや不安，敵意の高いことも明らかにした．つまり，統制不可能性をくり返し経験すると動機づけの障害だけではなく，情緒的な障害も生じることが示されたのである．さらに，Diener & Dweck (1978) は教育場面にも応用し，もとから自分の成績に対して随伴性を感じている子どもとそうでない子どもとに対して，正解のない図形課題に取り組むという非随伴的な経験をさせ，その後の課題方略の取り方がどう異なるのかを調べた．その結果，随伴性を感じている子どもはたとえ非随伴的な状況に置かれても有効な方略を取り続けるのに対し，非随伴性認知を持つ子どもはすぐにあきらめ，いい加減な方略を取ることが明らかになった．

しかし，学習性無力感の現象は動物の実験から発生していることもあり，それを人間に当てはめていくにしたがって，無力感への陥りやすさの個人差を説明することが困難になるなどの問題が生じてきた．それに対して Abramson ら (Abramson et al., 1978) は，統制不可能性（非随伴性）

の原因を何に帰属するかという原因帰属の概念を取り入れ，学習性無力感理論の改訂を行ったのである．

1.1.2.　改訂学習性無力感理論(Reformulated Learned Helplessness Theory)

Abramson ら (Abramson et al., 1978) は，Weiner (1972) の「原因帰属理論（Causal Attribution Theory; 図 2 参照)」をもとに，統制不可能性（非随伴性）の原因を何に帰属するかによって無力感の陥りやすさの違いを説明しようとした．

Weiner (1972) の理論によると，「成功・失敗という結果に対し，その原因をどう認知するかによって後続の行動での成功の期待や喚起される感情が変わり，この期待と感情を媒介として後続の行動が決定される」(Weiner et al., 1971)．この理論での原因帰属は 2 次元に分けられるが，その 1 つは，成功や失敗を安定した要因（たとえば，自分の特性など）に帰属するか不安定な要因に帰属するかという“安定性”の次元であり，この帰属によってその後の成功への期待が決まる．もう 1 つは，成功や失敗を自分の内在的な要因（たとえば，自分の能力など）に帰属するか外在的な要因に帰属するか（たとえば，運など）という“内在性”の次元であり，この帰属はその後生じる感情に影響を与える．

そこで，Abramson ら (Abramson et al., 1978) は，これら 2 つの原因次元のほかに，統制不可能（非随伴的）である事態をその状況固有な要因

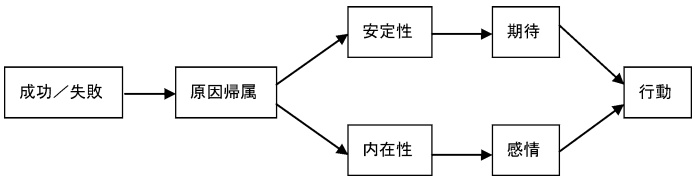

図 2　Weiner (1972) の原因帰属理論

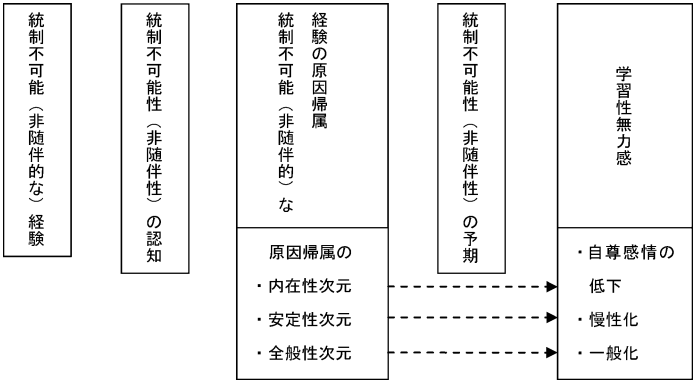

図 3　改訂学習性無力感理論（Abramson et al., 1978 を一部修正）

表 1　原因帰属：数学の試験で失敗した生徒の例 (Abramson et al., 1978)

		②安定性の次元	内在性の次元	
			内的（個人的無力感）	外的（普遍的無力感）
③全般性の次元	全般的	安定的	私は頭が悪いから（能力）	授業で習わないことが出たから（課題の困難度）
		不安定的	努力不足だったから（努力不足）	今日は 13 日の金曜日だったから（運）
	特殊的	安定的	数学の能力がないから	数学の試験はいつも不公平だから
		不安定的	風邪をひき計算能力が鈍っていたから	数学の問題が 13 問だったから

に帰属するか，生活全般の要因に帰属するかという“全般性”の次元を加え，「改訂学習性無力感理論（Reformulated Learned Helplessness Theory; 図 3 参照)」を提案した．たとえば，表 1 に示すように数学の試験で失敗した生徒の原因帰属の例を見てみると，①内在性の次元では，個人の内的 (internal) な要因（自分の能力など）に帰属するか外的な (external) 要因（課題の困難度など）に帰属するかに分かれる．ここで統制不

可能（非随伴的）経験を内的な要因に帰属すると，自尊感情が低下して無力感に陥りやすくなる．また，②安定性の次元では，安定的 (stable) な要因（自分の能力など）に帰属するか不安定な (unstable) 要因（自分の努力不足など）に帰属するかに分かれ，安定的な要因に帰属すると無力感が慢性化する．さらに，③全般性の次元では，どのような出来事にも共通する全般的な (global) 要因（“私は頭が悪い”など）に帰属するか，その状況で特殊的な (specific) 要因（“数学の能力がない”など）に帰属するかに分かれ，全般的な要因に帰属されると無力感は一般化する．この改訂理論では，抑うつ的な人は，否定的な出来事を内的・安定的・全般的に帰属する傾向があり（負の抑うつ的帰属様式），肯定的な出来事を外的・不安定的・特殊的に帰属する傾向がある（正の抑うつ的帰属様式）ことが仮定されている．

1.1.3.　学習性無力感に関する理論の限界

ここで，“「挫折」とはどのようなことか”，“ただの失敗と「挫折」との違いはどのような点にあるのか”という疑問に立ち戻り，それを検討しようとする際，以上のような学習性無力感に関する理論だけでは説明が不十分な点が，少なくとも 2 点挙げられる．

まず 1 つめは，学習性無力感に関する理論で扱われている「失敗」が持つ，「挫折」に対する応用可能性についてである．これらの理論では，何か回避したいものを自分で統制して回避できないという統制不可能性，または自分の行動と出来事が随伴していないという非随伴性を認知することが「失敗 (failure)」とされている．また，以上に挙げたような学習性無力感に関する理論の研究は，「失敗」である統制不可能性（非随伴性）の認知を人間に起こさせるために，算数課題やアナグラム課題（文字を並び替えて単語を作る課題）などのテスト課題が用いられているものがほとんどである．これは倫理的問題のため（たとえば，電気ショックを与えるよ

うな実験などはできないため）でもあるが，実際の文脈における“「挫折」とはどのようなことか”を検討するために，そのような「失敗」をどこまで応用できるかが疑問である．

そして２つめは，統制不可能（非随伴的）な出来事がその人自身に対して持つ意味を考慮していないという点である．これは鎌原ら (1983) や荒木 (2003) も指摘しているように，今までの学習性無力感に関する理論では，統制不可能（非随伴的）な出来事または否定的な出来事の原因帰属様式に注目しすぎて，その出来事が本人にとってどのような意味を持っているのかがあまり検討されてこなかった．しかし，否定的な出来事が自身にとってどのような意味を持っているかは，その後の無気力などに少なからず影響があると考えられる．たとえば，Feather & Davenport (1981) は失業者を対象に，就職に対して価値を感じている者ほど就職に失敗した際落ち込む度合いが高いことを明らかにしている．さらに，学習性無力感に関する理論では，「失敗」のくり返しを認知することによって無気力が生じるとされているが，もしそのことが自身にとって非常に意味のあることであったら，一度だけで無気力に陥る可能性もあるかもしれない．

以上のことをまとめると，これまでの学習性無力感に関する理論では，「失敗」という否定的な出来事の内容に対する考慮が不足していると考えられる．このような不足を補うためには，特に青年期の若者が実際にどのようなことを「失敗」だと思っているか（失敗観），さらにそれと比較して，どのようなことを「挫折」だと思っているか（挫折観），また，この２つはどのように異なるのかを明らかにする必要がある．これらを検討する際に手がかりとなるのが，松岡 (2009) による，失敗と挫折との違いに関する心理学的視点からの主張であろう．松岡 (2009) によると，「失敗はやるだけやってうまくいかなかった結果だが，挫折は行く手を阻む小石のようなもの」であり，挫折は「まだ結果は出ていない」ものである．つまり，失敗は，失敗をした時点で結果が出ており，本人にとってはそれに至

るまでの過程が重要であるが，挫折は，挫折をした時点ではまだ結果が出ておらず，その後どうするかが本人にとって重要だということではないだろうか．この主張をもとに考えられることは，失敗とはどのようなことかを考えるときよりも，挫折とはどのようなことかを考えるときの方がそれを経験した後の視点が含まれやすいということである．

したがって，次節では，青年期後期[2]における失敗観と挫折観，そしてその違いを明らかにするために実証的研究を行い，その結果を示したいと思う．

1.2.　実証的研究

1.2.1.　目的

以上で述べてきたことをふまえ，本研究の目的は，失敗観と挫折観との違いを明らかにすることである．その際特に，失敗や挫折を経験した後の視点が含まれているかどうかに着目し，失敗観よりも挫折観の方にこの視点が含まれやすいということを検証する．また，失敗観と挫折観との違いをより詳細に見るために，付随する感情価（ネガティブ，ポジティブなど）と内容の違いも検討していく．

さらに，失敗や挫折をどのようなものとして捉えているかには，挫折経験をしたことがあると思っているかどうかも影響していると思われるため，挫折経験の有無と失敗観や挫折観との関連も見ていく．また，青年期後期における失敗観や挫折観の特徴を明らかにするため，青年期後期以外における失敗観や挫折観と比較してみたい．

1.2.2.　方法

調査参加者）18 歳から 66 歳の 187 名のうち，無回答などを除く 18 歳か

[2] 本研究では，「失敗」や「挫折」に対し自分なりの意味づけが行われている可能性が高いと考えられるため，青年期の中でも後期に焦点を当てた．

ら 66 歳（最頻値＝19）の 172 名（男性：65 名，女性：107 名）．このうち，青年期後期[3]は 128 名，それ以外は 43 名，不明が 1 名であった．

調査時期と手順）2007 年の 7 月・8 月と 2009 年の 6 月に，質問紙法で行った（大学構内や授業内，または E メールで配布・回収）．

尺度）失敗観と挫折観は，失敗や挫折の比喩とその理由（秋田 (1996) を参考）で測定した．具体的には，「「失敗」とは（　　）のようだ．なぜなら，（　　）からだ．」という形式で，失敗の比喩とその説明を括弧内に記入することを求め，挫折に対しても同じように行った．

挫折の有無については，「あなた自身，「挫折」の経験がありますか．」という問いに対し，「はい」か「いいえ」で回答してもらった．その際，挫折経験だと自身が考えている経験をしたかどうかを聞くために，「この「挫折」とは，特に定義はなく，あなたが思う「挫折」のことを指します．また，そう考えてみれば「挫折」かもしれない，と思うものでも結構です．」という教示を加えた．

1.2.3　結果

無回答や比喩になっていないものを除き，失敗観は 166 名，挫折観は 165 名を分析の対象とした．尚，失敗観や挫折観の分類は，生成された比喩自体ではなく，その説明をもとに行った．

失敗観と挫折観の違い―経験後の視点）失敗観と挫折観において，失敗や

[3] 一般的に青年期後期は大学生ぐらいまでとされているが，現在は「青年期の遷延」現象が生じている（齋藤，2005）という指摘から，本研究では 18 歳から 20 代半ばの 25 歳までを青年期後期とした．

挫折経験後の視点の有無[4]に違いがあるかどうかを調べた．経験後の視点があるかどうかの基準については，たとえば，「成功につながる」「（失敗や挫折によって）成長する」などは，失敗や挫折を経験した後どうなるかについて述べられているので，経験後の視点「あり」に分類した．また，経験して「落ち込む」「先が見えない」なども「あり」に分類した．一方，失敗や挫折を経験する前のこと（たとえば，失敗や挫折の原因）を述べているものは，経験後の視点「なし」に分類した．

その結果，失敗観で経験後の視点「あり」は129名(77.7%)，「なし」は37名(22.3%)であった．また，挫折観で経験後の視点「あり」143名(86.7%)，「なし」22名(13.3%)であった．挫折観では，挫折を経験した後の視点「あり」が9割近くまで達しており，失敗観よりも多い可能性が考えられる．

失敗観と挫折観の違い―感情価）失敗観と挫折観において，随伴する感情価に違いがあるかどうかを検討した．尚，失敗観で経験後の視点「あり」に分類できた129名，挫折観で経験後の視点「あり」に分類できた143名を対象に分析した．

感情価は，「ポジティブのみ」「ネガティブのみ」「（ポジティブとネガティブの）両方」「なし」に分類できた[5]．「成長する」「学べる」などポジティブなことのみに言及している場合は「ポジティブのみ」に，「落ち込む」「先が見えない」などネガティブなことのみに言及している場合は，「ネガティブのみ」に分類した．「つらいけど成長できる」などネガティブなこととポジティブなこと両方を含んでいる場合は「両方」に，以上のよ

[4] 本研究における全分類の評定一致率は，他の評定者1名の評定結果との一致率を求めることによって算出し，不一致箇所は協議によって解決した．失敗観の一致率は88.6%，挫折観の一致率は84.2%であった．

[5] 失敗観の一致率は77.5%，挫折観の一致率は81.1%であった．

うな感情価を伴っていないと考えられるものは，「なし」に分類した．

その結果，失敗観では，「ポジティブのみ」が 41 名 (31.8%)，「ネガティブのみ」が 19 名 (14.7%)，「両方」が 64 名 (49.6%)，「なし」が 5 名 (3.9%) であった．挫折観では，「ポジティブのみ」が 23 名 (16.1%)，「ネガティブのみ」が 65 名 (45.5%)，「両方」が 35 名 (24.5%)，「なし」が 20 名 (14%) であった．失敗観では「両方」が半数近くで最も多く，その次に「ポジティブのみ」が続いているが，挫折観では「ネガティブのみ」が半数近くで最も多く，その次に「両方」が続いていた．失敗観では「ポジティブのみ」+「両方」が全体の約 8 割に，挫折観では「ネガティブのみ」+「両方」が全体の約 7 割に達していた．

失敗観と挫折観の違い―内容）失敗観と挫折観において，内容に違いがあるかどうかを検討した．尚，失敗観で経験後の視点「あり」に分類できた 129 名，挫折観で経験後の視点「あり」に分類できた 143 名を対象に分析した．

失敗観と挫折観に共通する内容として，「傷つき」「回復」「成長」「転機」「諦め・終了」「その他」に分類できた[6]．「傷つく」「ダメージを受ける」など，傷つくことのみ述べられていて，そこから元に戻る，這い上がるなどの言葉がない場合は，「傷つき」に分類した．また，ネガティブ感情が述べられているだけも，「傷つき」に分類した．「元に戻れる（または戻れない)」「這い上がるのが大変」など回復についての言及がある場合は，「回復」に分類し，「成功につながる」「成長する」「強くなる」「～を学べる」「新たな視点を獲得できる」などは，「成長」に分類した．失敗や挫折を経験して元に戻れるかどうかのみに言及されているものを「回復」，それを乗り越えた後にどうなるかについて言及されているものを「成長」

[6] 失敗観の一致率は 82.2%，挫折観の一致率は 82.5%であった．

と考えた．また，失敗や挫折によって「変化する」「選択を強いられる」「一旦立ち止まって反省する」などは「転機」に，「壁にぶつかる」「出口が見えない」「そこで終わる」などは「諦め・終了」に分類した．以上のもの以外は，「その他」とした．

その結果，失敗観では，「傷つき」が19名(14.7%)，「回復」が27名(20.9%)，「成長」が69名(53.5%)，「転機」が4名(3.1%)，「諦め・終了」が1名(0.8%)，「その他」9名(7%)であった．挫折観では，「傷つき」が38名(26.6%)，「回復」が26名(18.2%)，「成長」が42名(29.4%)，「転機」が21名(14.7%)，「諦め・終了」が8名(5.6%)，「その他」が8名(5.6%)であった．失敗観では「成長」が半数強で最も多く，その次に「回復」「傷つき」の順で続いているが，挫折観は全体的に分散している．失敗観と比較すると，挫折観の方が特に「転機」と「諦め・終了」の多いことが特徴的だと言える．

挫折経験の有無との関連）失敗観と挫折観の経験後の視点，付随する感情価，内容において，挫折経験の有無による有意な差があるかどうかを検討した結果（χ^2検定），失敗観と挫折観ともに有意な差が見られなかった．したがって，挫折経験があると思っているかどうかは，失敗観や挫折観に影響を与えないことが考えられる．

青年期後期の特徴）青年期後期における失敗観や挫折観の特徴を明らかにするために，経験後の視点，付随する感情価，内容において，青年期後期とそれ以外とに有意な差があるかどうかを検討した（χ^2検定）．その結果，失敗観において，経験後の視点($\chi^2(1)=4.31$, $p<.05$)で有意な差が見られた（表2）．また，有意な差が見られたとは言い難いが，失敗観の感情価（$\chi^2(3)=6.87$, $p<.10$; 表3）や挫折観の経験後の視点（$\chi^2(1)=3.51$, $p<.10$；表4）でも，10%水準で有意な傾向が見られた．具体的には，青

表２　青年期後期と失敗観経験後のクロス表

		青年期後期		合計
		青年期後期	その他	
失敗観経験後	あり	101	27	128
	なし	23	14	37
合計		124	41	165

※数字は度数

表３　青年期後期と失敗観感情価のクロス表

		青年期後期		合計
		青年期後期	その他	
失敗観感情価	ポジティブのみ	27	14	41
	ネガティブのみ	15	4	19
	両方	55	8	63
	なし	4	1	5
合計		101	27	128

※数字は度数

表４　青年期後期と挫折観経験後のクロス表

		青年期後期		合計
		青年期後期	その他	
挫折観経験後	あり	111	32	143
	なし	13	9	22
合計		124	41	165

※数字は度数

年期後期の者の方が，失敗観において失敗を経験した後の視点を含みやすいことが明らかになった．また，青年期後期の者の方が，失敗観においてポジティブとネガティブ両方の感情価を付随させやすいのに対し，それ以外の者は，ポジティブのみの感情価を付随させやすい可能性が示された．一方，挫折観においても，青年期の者の方が挫折を経験した後の視点を含みやすい可能性が示唆された．

1.2.4　考察

まず，失敗や挫折とはどのようなことかを考える際，それを経験した後の視点を含むかどうかに，失敗と挫折とで違いが見られるかを検討した．特に，失敗観よりも挫折観の方にこの視点が含まれやすいという仮説を立て，これを検証した．その結果，失敗観では，失敗を経験した後の視点を含んでいたものが全体の 8 割弱，挫折観では，挫折を経験した後の視点を含んでいたものが全体の 9 割近くまで達していた．どちらもほとんどが上述した視点を含んでいたと言えるが，挫折とはどのようなことかを考える際に，その視点がより含まれやすいことが考えられる．したがって，挫折観にそれを経験した後の視点がより含まれやすいという仮説は，支持された可能性がある．この可能性を考えるとすれば，それではなぜ，そのような違いが生じるのだろうか．

この疑問を解く手がかりとなるのが，失敗観と挫折観の内容の違いであろう．この違いを調べた結果，失敗を経験することで成長できたり何かを学べたりするというような失敗観が多く，失敗をしてもすぐ元に戻れる，つまずくだけのことだというような考えも多かった．しかし，失敗を経験することが生きていく上で転機になる，失敗を経験するとそこで何かが終わってしまうというような失敗観は，合計しても全体の 5%に満たないほど，ほとんど見られなかった．その一方，挫折観においては，挫折経験が人生の転機になる，挫折を経験したら何かが終わってしまう，先が見えないというような考えが，合計して全体の 20%くらいを占めていた．したがって，挫折とはどのようなことかを考える際，挫折を経験することで方向転換をする必要が生じたり先が見えなくなってしまったりするという考えがあれば，挫折を経験した後のことも含み込んで考えざるを得ないのではないだろうか．それによって，挫折観の方が経験後の視点が含まれやすいのかもしれない．

また，失敗や挫折とはどのようなことかを考える際に伴う感情価につい

ても検討した結果，失敗観には，失敗はつらいけど成功につながるなどネガティブとポジティブ両方の感情が伴っているものが50％近くで最も多く，それについで，ポジティブな感情のみを伴っているものが30％ほどで多かった．一方，挫折観には，ネガティブのみの感情を伴っているものが50％近くで最も多く，それについで，ネガティブとポジティブ両方の感情を伴っているものが25％近くで多かった．この結果から，失敗については，失敗をすれば苦しいけれどそれが成功につながるというように，ポジティブな感情を含んで考えられやすいが，挫折については，挫折をすれば先が見えなかったり元に戻れなかったりするというように，ポジティブな感情が含まれずにネガティブな感情のみを伴って考えられる可能性があると言える．

さらに，挫折経験をしたことがあると思っているかどうかは，失敗観と挫折観とで異なるかを調べてみた結果，経験後の視点，付随する感情価，内容すべてにおいて有意な差が見られなかった．この結果から，挫折経験の有無は失敗観や挫折観に影響を及ぼさない可能性が考えられる．しかし，本研究では挫折経験があると回答した者が全体の８割程度おり，経験のある者とない者との割合のバランスが取れていないため，正確に比較できているとは言い難い．したがって，挫折経験のない者の割合を増やし，再検討する必要があるだろう．

最後に，青年期後期における失敗観と挫折観の特徴を明らかにするため，青年期後期以外との比較を行ってみた．その結果，青年期後期の方が，失敗を経験した後の視点を含んで失敗を考えやすいことが明らかになり，挫折についても挫折経験後の視点を含んで考えやすい傾向が示された．また，青年期後期の方が，ポジティブとネガティブ両方の感情を伴って失敗を考えやすいのに対し，それ以外の者は，ポジティブのみの感情を伴って失敗を考えやすい傾向が示唆された．しかし，挫折経験の有無の場合と同様に，本研究では青年期後期とそれ以外との割合のバランスが取れ

ていないため，正確に比較できているとは言い難い．したがって，青年期後期以外の割合を増やし，もう一度検討する必要があるだろう．

2. おわりに

本論文では，特に青年期後期における失敗観と挫折観との違いに注目し，“「挫折」とはどのようなことか”について心理学的考察を行ってみたが，この疑問に取り組む際，もう一つの疑問が生じてくることに注意する必要があるだろう．すなわち，“「挫折」を乗り越えるとはどのようなことか”という疑問である．冒頭で，「挫折」は否定的な影響だけを持っているわけではない可能性について言及したが，たとえば，「挫折」によって「成長する」とはどのようなことだろうか．逆に，「挫折」を乗り越えていない状態とはどのような状態なのだろうか．

このような疑問について検討する際に有益となるのが，神谷・伊藤(1999)の挫折経験に関する研究であろう．この研究では，挫折経験に伴うネガティブな感情がなくなり，「今ではいい思い出である」「今思い出してもなんとも感じない」と判断するようになることが，「挫折」を乗り越えた状態を示す指標の１つとして扱われている．さらに，「挫折」という言葉は使われていないものの，ネガティブな経験を経た現在の状態として，「問題が解消されている」「距離が取れている」「問題を引きずっているところがある」という状態が明らかになっている研究（松下，2008）もある．これらの状態のうち，「問題が解消されている」「距離が取れている」は挫折を乗り越えた状態に，「問題を引きずっているところがある」は乗り越えていない状態となり得るかもしれない．また，本研究の結果でも見られたが，挫折観に「成長」という視点を取り入れるなどのように，「挫折」という経験を受け入れるだけではなく，それに対し何らかの肯定的な意味づけを行っている状態も，「挫折」を乗り越えた状態として考えられるのではないだろうか．

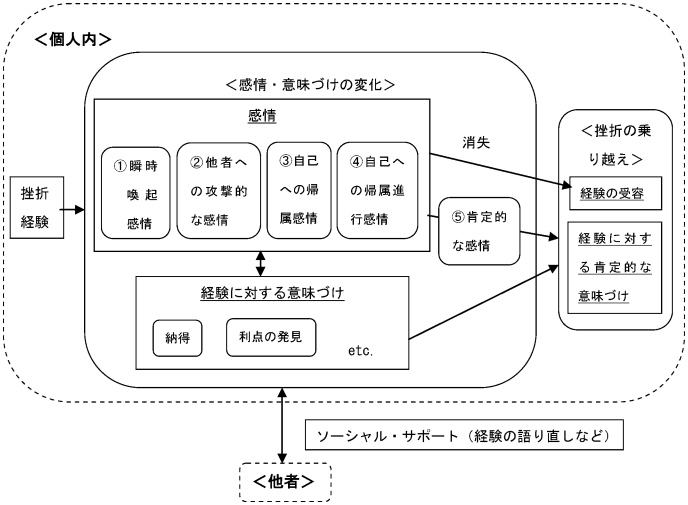

図 4 「挫折」を乗り越えるまでのプロセスモデル

さらに，“「挫折」を乗り越えるとはどのようなことか”という疑問に取り組むにあたって，「挫折」を乗り越えた（または乗り越えていない）状態だけでなく，そのような状態になるまでのプロセスも明らかにすることが重要である．ここで，このプロセスについて検討する際に，先述した「挫折」に対する意味づけやそれに伴う感情の変化が関連してくるのではないだろうか．直接「挫折」という言葉は使われていないが，このプロセスに関連する先行研究をもとに立てた「挫折」を乗り越えるまでのプロセスは，図 4 に示してある．まず，「挫折」に対する意味づけの変化に関連する研究として，たとえば，Davis, Nolen-Hoeksema, & Larson (1998) の研究が挙げられる．Davis らは，身近な人の死という出来事に対して，既存のスキーマの中でその出来事をとらえようとする「納得 (sense making)」と，新しい概念を獲得しながらその出来事をとらえようとする「利点の発見 (benefit finding)」という意味づけが行われることを明らかにし，これら 2 つの意味づけは時間経過によって変化することも示した．

次に，「挫折」に対する意味づけの変化に伴う感情の変化に関連する研究として，たとえば，丸本(2007)の重要な失敗によって喚起される感情の変化に関する研究が挙げられる．丸本によると，自身にとって重大な失敗によって喚起される感情には，①失敗を認知して瞬時に喚起される感情（「不愉快・困惑」「羞恥」「おどろき」など），②他者に対して喚起される攻撃的な感情（「怒り」「嫉妬」「嫌悪」など），③自己に原因を帰属し始める過程の感情（「罪の予感」「罪悪感」「反省」），④自己に帰属する過程が進行し喚起される感情（「無能感」「後悔」「あきらめ」など）があり，これらは時間経過とともに変遷していく．「挫折」の乗り越えへのつながりについて考えてみると，以上のような否定的な感情が消失すれば「挫折」の受容につながり，これらがさらに肯定的な感情に変化すれば「挫折」に対する肯定的な意味づけにつながるかもしれない．

ここで注目すべきことは，「挫折」を乗り越えるプロセスには，個人内の要因だけではなく個人外の要因も関連してくるということである．「挫折」を経験してから，その経験について他者に語り直しをしたり支援を求めたりすることは，社会的環境にいる限り十分に起こり得ることであろう．そのような「個人を取り巻く人々から受ける多様な形の支援」（石毛・無藤，2005）であるソーシャル・サポートを受けることが，「挫折」の意味づけやそれに付随する感情の変化にも影響を与えることが考えられる．したがって今後は，「挫折」の乗り越えに関連する研究（たとえば，ストレス対処プロセス研究（Lazarus & Folkman, 1984など））と自身の研究との位置づけを明確にし，このモデルをさらに精緻化し検証することが課題となってくる．

引用文献

阿部真里子(2005)思春期の子の挫折にどう向き合うか　児童心理，**59**(1), 57–60.

Abramson, L. Y., Seligman, M. E. P., & Teasdale, J. (1978) Learned helpless-

ness in humans: Critique and reformuration. *Journal of Abnormal Psychology*, **87**, 49–74.

秋田喜代美 (1996) 教える経験に伴う授業イメージの変容―比喩生成課題による検討― 教育心理学研究, **44**, 176–186.

荒木友希子 (2003) 学習性無力感における社会的文脈の諸問題 心理学評論, **46**(1), 141–157.

Davis, C. G., Nolen-Hoeksema, S., & Larson, J. (1998) Making sense of loss and benefiting from the experience: Two construals of meaning. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**(2), 561–574.

Diener, C. I., & Dweck, C. S. (1978) An analysis of learned helplessness: Continuous changes in performance, strategy, and achievement cognitions following failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 451–462.

Feather, N. T., & Davenport, P. R. (1981) Unemployment and depressive affect: A motivational and attributional analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **41**, 422–436.

鎌原雅彦 (1985) 学習性無力感の形成と原因帰属及び期待変動について 東京大学教育学部紀要, **25**, 41–49.

鎌原雅彦・亀谷秀樹・樋口一辰 (1983) 人間の学習性無力感 (Learned Helplessness) に関する研究 教育心理学研究, **31**(1), 80–95.

Hiroto, D. S. (1974) Locus of control and learned helplessness. *Journal of Experimental Psychology*, **102**, 187–193.

石毛みどり・無藤 隆 2005 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連 ―受験期の学業場面に着目して― 教育心理学研究, **53**, 356–367.

Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984) *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer Publishing Co., Inc.

丸本奈央 (2007) 重大な失敗により喚起される感情の構造と特徴 関西大学大学院『人間科学』, **66**, 83–99.

松岡素子 (2009) 挫折をバネにできる発想を身につける 児童心理, **63**(5), 52–56.

松下智子 (2005) ネガティブな経験の意味づけ方と開示抵抗感の関連 心理学研究, **76**(5), 480–485.

松下智子 (2008) ネガティブな経験の意味づけ方の変化過程―肯定的な意味づけに注目して― 九州大学心理学研究, **9**, 101–110.

Miller, W. R., & Seligman, M. E. P. (1975) Depression and learned helplessness

in man. *Journal of Abnormal Psychology*, **84**, 228–238.

永井　撤 (1993) 心のたくましさを育てる―挫折体験に負けない―　児童心理，**47** (7), 37–41.

Overmier, B. J., & Seligman, M. F. P (1967) Effects of inescapable shock upon subsequent escape and avoidance responding. *Journal of Comparative and Physiological Psychology*, **63**, 28–33.

三枝孝弘 (1982) 挫折感を与えない学習指導　児童心理，**36**(8), 84–89.

齋藤憲司 (2005) 第２章３節　大学生の無気力　大芦　治・鎌原雅彦（編）無気力な青少年の心 Pp. 87–98.

Seligman, M. E. P., & Maier, S. F. (1967) Failure to escape traumatic shock. *Journal of Experimental Psychology*, **74**, 1–9.

Seligman, M. E. P., Maier, S. F., & Solomon, R. L. (1971) Unpredictable and uncontrollable aversive events. F. R. Brush (Eds.) *Aversive conditioning and learning*. New York: Academic Press. Pp. 347–400.

品川不二郎 (1987) 子どもの自信を育てるきびしさ―挫折感・敗北感を植えつけない―　児童心理，**41**(12), 41–45.

Weiner, B., Frieze, I. H., Kukla, A., Reed, L., Rest, S., & Rosenbaum, R. M. (1971) Perceiving the causes of success and failure. In E. E. Jones, D. Kanouse, H. H. Kelly, R. E. Nisbett, S. Valins, & B. Weiner (Eds.), *Attribution: Perceiving the causes of behavior*. Morristown, New Jersey: General Learning Press.

Weiner, B. (1972) *Theories of motivation: From mechanism to cognition*. Chicago: Markham.

* 本研究は，平成21年度慶應義塾大学大学院博士課程学生研究支援プログラムによる研究補助を受けて行われた.